

# 汲古一紙

## 『短歌と書写』(四)

中村素堂

とにかく写本は別として、古い時代の歌人あるいは歌人兼書家たちは、同時代以前の他人の作、ことに名歌と謳われてゐるものは、誰の作でも大いに書き、現存するもので見ると自作歌を自書したものがむしる少なくらいの人もある。それが現代では、書の技術とは全く相関わらないで、他人の歌は一切書かず自作の言葉だけを内容の風趣にはかかわらずただただ自書するだけである。

これと対比するかのようには、歌を自作しない書家はもっぱら他人の歌ばかりを書いている。したがってその書は歌の内容とは無関係で、ただ書としての技巧のいかんにだけ専心して、流派、型、様式によつて墨量も豊かに、短歌の持つ詩感覺とは別に、ほぼ流行の書作品として愉しいものを近代性の象徴のように作っている。

前者は言葉を造形して視感覺に憩える技術を措いて、言葉の伝達としてだけの文字を書いている。後者は視感覺における文字造形の興味だけを追求して、その表現のための資材となつてゐる文字、言葉の持つ感情を捨て、ただ造形だけが書芸術と解している。

こんな経験がある。大東文化大学の創立者であつた土屋竹雨先生が漢詩研究を番社に講じて下さつた時、ご自作の詩を興にのつて吟ぜられたことが何度かあつた。側々として腸に沁みかゝる調をもつて、調でもまた詩とともに喜怒哀楽を唱つておられた。詩情の理解も何もないのに、詩が謳えろと自信してある会合の席で王維陽関三疊を鞭声雨々調べやつていた実業家を見て、耳を塞ぎたくなつたことがある。

また、もう故人となられたある歌壇の大家が、知人の創作的書道を以つて任じている人からの懇篤な招待で、上野の美術館へ行きその人の作品を前にして、すばらしい線の躍動を見ているうちに、一

体これは何が書いてあるのか、と気づいて読める字を拾つてだんだん読んでゐるうちに、これは自分の歌だということに気づき、ご招待下さつた真意は判つたが、ああしてみると、あれは僕の歌とは見えないネ——とこぼしてゐた。

時代の流れの中で、歌と書がそれぞれに分離して独自の方向に発展していった現実の姿であるが、このような状態を招来した一番大きな原因は短歌は全く活字によつてのみ発表されるものとなり、その伝達普及も觀賞もすべて歌集、新聞雑誌等によつて遺憾なく使命を竭しているかになつており、難読、古風な筆書きの文字をもつて書かれたものは、関わりのない読者・鑑賞者にとっては外国語よりも読めないのである。

一方平安・藤原時代の短歌の発展とともに美の極地まで進展したといわれる仮名の書は、流派的様式が流行してきた鎌倉期以後次第に下り坂になり室町期に入ると、俗化の様相を濃くして江戸の末期までできてしまひ、明治、大正と復古の傾向にあつたものが昭和に入るとさらに近代化なものも加えて、すばらしい古典的開花をするかに見えていたが、戦後の日本改造に近い生活様式の変貌は急速に進み、住宅はぐつと明るくなりまた硬質にもなつてきた。それに書の内容の公開展示場もみなコンクリートの大型になり、觀賞の視距離も広くなつた等の理由で床の間の展示物ではひ弱なために、額作りの様式が逐次増加し、この硬質環境に対応するには、王朝風の繊細な線の連綿する仮名の柔軟さでは、皆童的なものは別として大分相容れなくなつてきた。

これが当然の帰結として仮名の書も迫力もありポリウムもある漢字と中和した新鮮なものが醸し出されてきた。いわゆる近代仮名と称するものであるが、今やこれが仮名書きの書の主流となつてきた感さえある。(つづく)